

【論 説】

〈特集：ジャウィ月刊誌『カラム (Qalam)』研究〉

特集にあたって—『カラム』研究の意義

坪井祐司

本特集は、1950年7月にシンガポールで創刊され、途中で刊行地をマレーシアに移して1969年まで発行されたジャウィ（アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法）の月刊誌『カラム (Qalam、マレー語、アラビア語でペンを意味する)』に関する論文を集成したものである。以下では、まず『カラム』誌およびその主筆であるエドルス (Edrus)<sup>1</sup>についての紹介を行ったうえで、各論文の内容を簡単に紹介することとしたい。

I エドルスと『カラム』

1. 主筆エドルスとカラム出版社

エドルスは、フルネームをサイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル=エドルス (Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus) といい、1911年にカリマンタンのバンジャルマシんでアラブ系の両親のもとに生まれた<sup>2</sup>。彼は1930年にシンガポールに渡り、アラブ人の経営する出版社で写植工として働いたのち、ジャーナリストとなった。第二次世界大戦後の1948年、エドルスはカラム出版社 (Qalam Press) を創立して大衆小説を次々と出版し、上々の売れ行きを記録した。この資金をもとに、彼は1950年8月に月刊誌『カラム』を創刊した。1951年9月には印刷機を購入して自社で印刷が行えるようになり、エドルスは小説の出版をやめて『カラム』の発行に精力を傾けた。

第二次世界大戦後、マレー語出版界は活況を呈した。民族主義などの政治運動の高揚にくわえて、多色刷りで写真をふんだんに使用した大衆的な雑誌も増加したためである。1946年からマラヤ独立の1957年までの間に145の雑誌、46の新聞が発行された。なかでもシンガポールは出版の中心であり、64の雑誌が発行された (Hamedi, 2013: 48-50)。カラム出版社も、政治的主張を前面に出した『カラム』にくわえて、『アネカ・ワルナ (Aneka

---

<sup>1</sup> 彼は『カラム』誌上でエドルス、アフマド・ルトフィ (Ahmad Lutfi) といった筆名を使用していたが、ここでは本名の一部であるエドルスの呼称を使用する。エドルスについては、以下の詳細な伝記がある (Talib Samat, 2002)。

<sup>2</sup> サイドはムハンマドの子孫であることを示す称号であり、アラブの血統を示唆する。アル=エドルス家はカリマンタンのポンティアナクの出自であった。母方の曾祖父はバンジャルマシンのアラブ人指導者であったという (Talib Samat, 2002: 1)。

Warna)』、『フィルム (Filem)』などの娯楽色の強い雑誌を含む六つの定期刊行物を出版して経営の安定を図った。しかし、カラム出版社はエドルス個人の経営に近い経営形態であったため、エドルスが1969年に死去するとともに『カラム』も停刊することとなった。

## 2. 月刊誌『カラム』<sup>3</sup>

『カラム』の発行部数は、官報によれば1950年代初頭で3,000部であり、当時の硬派な内容の雑誌としてはかなり多かった (Hamed, 2013: 247)。同誌はマラヤの独立を主導したマレー民族主義政党であるUMNO (United Malay National Organization) とは対立関係にあり、1953年には同党のボイコット運動により雑誌が燃やされるという事件が起きて経営的に打撃を受けた<sup>4</sup>。しかし、雑誌の発行自体はその後も続いた。20年という『カラム』の発行期間は、創刊して1、2年で停刊になるマレー語雑誌が多いなかでは例外的に長い。個人経営に近い出版社のもとで20年間出版が続いたこと自体、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、その記事が一貫してジャウィによって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム<sup>5</sup>化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった<sup>6</sup>。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領 (現インドネシア) 地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領 (マラヤ、シンガポール) でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

このため、『カラム』のもう一つの特徴はマレー・インドネシア世界のムスリムの紐帯を強調したことである。『カラム』の魅力は多彩なコラム記事とその執筆者にある。『カラム』の記事は、政治・経済・哲学・思想・文化など多岐にわたった。なかでも、読者のさまざまな相談にイスラムの立場から答える「千一問」や、アフマド・ルトフィが筆名を使って社会への提言を記した「苦いコーヒー」などのコラムは、創刊当初から停刊まで続い

<sup>3</sup> 『カラム』誌については、(山本, 2002) が主筆エドルスおよび内容の紹介を行うとともに、全号の目次のローマ字翻字を掲載している。

<sup>4</sup> これは、主に宗教の位置づけをめぐる『カラム』がたびたびUMNOを鋭く批判したためである。『カラム』とUMNOの関係については本特集の坪井論文でも触れられている。

<sup>5</sup> 現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本特集では現地の発音に即してイスラムと表記する。

<sup>6</sup> 東南アジアのイスラム化は13世紀末に始まるが、現在確認される最古のジャウィ資料は1303年の記年を持つトレンガヌ碑文である (Hashim Musa, 1997: 88-89)。

た。記事の執筆者にはマラヤやシンガポールだけでなくインドネシアの著名なムスリム知識人も迎え、インドネシアや他のアジア諸国のムスリム社会の情勢に関する記事も多く掲載していた。ザアバ (Za'ba) がマレー語やイスラムについて連載を持っていたほか、マラヤ/シンガポールのブルハヌッディン・アル=ヘルミ (Burhanuddin al-Helmi) やズルキフリ・ムハマド (Zulkifli Muhammed)、インドネシアのイサ・アンシャリ (Isa Ansyari) やハムカ (HAMKA) など、マレー・イスラム世界の著名なムスリム指導者がしばしば寄稿していた。エドルス自身もさまざまな筆名を使ってコラムや論文を執筆していた。また、エジプトで学ぶマレー・イスラム世界出身の留学生からの寄稿などを通じて、中東のイスラム思想を積極的に誌面で紹介していた<sup>7</sup>。一方で、読者層も出版地であるシンガポールにとどまらず、マラヤ各州からタイ南部、ボルネオ島北部にも広がっていた<sup>8</sup>。

国籍にかかわらずムスリムの紐帯を強調した『カラム』は、1950年代から60年代にかけてのマレー・イスラム世界において、国境を超えたイスラム主義の思想や運動を知るうえでの貴重な資料であるといえる。

### 3. 『カラム』研究プロジェクト

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにする上で貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用できる研究者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

このため、山本博之と本特集の執筆者らは「ジャウィ文献と社会」研究会<sup>9</sup>を組織し、京都大学地域研究統合情報センターの協力のもと、各地の図書館に所蔵されている『カラム』を収集し、デジタル化して全体で1つのコレクションとして整理・公開するとともに、『カラム』の記事をジャウィからローマ字に翻字し、より広い利用者の利用に供してきた。現在、同研究会の『カラム』雑誌記事データベースを通じて、記事ごとのジャウィ版とローマ字版の画像の公開が開始されている<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> 編集者エドルスは1956年に『カラム』誌上でシンガポールにおけるムスリム同胞団の結成を宣言し、同誌は同団体の事実上の機関誌となった。シンガポールのムスリム同胞団については(山本, 2003)を参照。

<sup>8</sup> 『カラム』誌上のムスリム同胞団の団員名簿からは、タイやボルネオ在住の読者の存在がうかがえる(山本, 2002: 264)。

<sup>9</sup> 「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである。

<sup>10</sup> 『カラム』雑誌記事データベースは下記を参照 <http://majalahqalam.kyoto.jp/> (2014年9月20日最終アクセス)。ジャウィ版はすべての記事にアクセスすることができる。ローマ字版へのアクセスは現在一部のみにとどまるが、順次公開を進めていく予定である。

さらに、京都大学地域研究統合情報センターの共同研究「脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像」では、このデータベースを利用して、メンバーがそれぞれの問題関心から『カラム』の記事を利用し、1950年代および60年代のマレー・イスラム世界の社会史を描きだすための研究を行っている。本特集は、その研究成果の一部である。

## II 各論の紹介と展望

### 1. 各論の紹介

本特集は四編の論文からなる。いずれも、著者がそれぞれの専門分野から『カラム』の内容の分析を行ったものである。

國谷論文は『カラム』のイスラム思想をとりあげ、東南アジアにおけるイスラム近代主義について考察している。國谷はシンガポールのウラマがエジプトの近代主義的イスラム思想を紹介した連載記事を取りあげた。そこでは、クルアーンが現在の西洋文明の成果である近代科学の内容を包含しており、その教えは現在でも発展の道標として有効であると主張される。著者は、西洋近代の科学や技術の受容という意味での近代化を肯定する一方で、西洋化の負の側面としてそれが倫理や道德の退廃を招くことを批判し、これを防ぐための道德的指針としてクルアーンを位置付けた。著者のようなイスラム知識人は、イスラムが単に宗教の世界にとどまるものではなく、近代を生きるムスリムが社会生活を送るうえでの指針を提示していると考えていた。こうした思想は、イスラムを近代社会の既存の秩序や枠組みと適合的なかたちで発展させようとする試みとして理解できる。

坪井論文は独立以前のマラヤ政治に対する『カラム』の論評を扱っている。近代国家形成期に東南アジアのムスリムの課題はイスラムと国家制度との結びつきであった。1950年のシンガポールで起こったナドラ問題（ムスリム女性により育てられたオランダ人少女の親権をめぐる係争）では、改宗や結婚といった個々のムスリムの宗教実践が非ムスリムの決めた法律によって左右されることが明らかになった。マラヤにおいては、社会内部の民族や宗教がさまざまな形で行政や政治制度のなかに組み込まれている。エドルスは、公権力を通じたイスラムの制度化の必要性を主張した。独立準備を進めていたマラヤでは、マレー人、華人、インド人という各民族の政党が連携し、国家体制をめぐる調整が行われていた。こうした民族を制度化する動きに対抗し、エドルスは宗教を国家行政へと制度化することでムスリムの地位を強化しようとしたのである。

独立を迎えると、個々の生活領域についての具体的な制度化の問題があらわれるようになる。金子論文では教育の制度化をめぐる議論を扱っている。マラヤの国民教育制度は民族別に分けられており、そのなかでいかにマレー人の地位を上昇させるかが課題となっていた。一方で、別系統に位置づけられたイスラム教育に関しては弱体化への危機感が持た

れ、その要因とみなされた世俗の近代教育に対する批判も展開された。しかし、『カラム』は伝統的なイスラム教育の意義とその存続の必要性を強調しつつも、1950年代なかば以降はイスラム教育を国家の教育制度の中に組み込むことは受け入れた。受け入れたうえで自分たちにとって望ましい運用がなされる状況を確保しようとする戦略がとられたのである。教育をめぐる『カラム』の議論は、マラヤの独立という状況を受けて、近代国家という枠組みのなかでマレー人コミュニティが持続的に発展することを目的としたものとなった。

光成論文は、シンガポールの植民地から独立国家への移行期にあたる1957～66年のイスラム法制について扱っている。光成が目じたのは、一連のイスラム法制により、それ以前のムスリムの婚姻、離婚登録の制度化がすすめられた点である。そこでは、ムスリムが非ムスリムと同じ制度のもとにおかれるかどうか議論された。多妻婚の禁止、婚姻における女性の権利保護などをムスリムにも適用せよという主張もムスリム内部からあらわれたが、『カラム』はそれを権利の侵害として批判した。この相違は、イスラム法制をムスリム独自の権利と義務の履行を保証する体系とみるか、ムスリムに非ムスリムと同質の福祉を提供するための枠組みととらえるかの相違であった。多民族社会のなかで、宗教や民族の違いを超えて適用されるべき規範と、宗教や民族ごとに取り決められるべき規範をどのように区別し適用するかをめぐる議論であったのである。

## 2. 『カラム』の時代：展望にかえて

『カラム』が発行された1950、60年代は、東南アジア諸国における近代国家建設の時代であった。この時期は、後の開発の時代に先立って議会制民主主義の導入が試みられた言論の時代でもあった。アラビア語で「ペン」を意味する『カラム』という誌名は、文字で書かれる言論を戦わせることで社会秩序が形成されていった時代を象徴している。

『カラム』研究の意義は、以下の二点にある。第一は、この時期のイスラム主義勢力の思想、動向の解明である。インドネシアとマラヤ／マレーシアのそれぞれの国民形成史を描こうとする従来の研究では、民族主義勢力によるそれぞれの国家建設に関心が集中し、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられなかった。しかし、『カラム』の記事からは、独立国家が形成されてからも、当時のムスリム知識人がさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。これまであまり注目されてこなかったイスラム主義勢力の動きを見ることによって、各国史の寄せ集めとは異なるマレー・イスラム世界の近現代史を描くことが可能になる。

第二は、イスラム近代主義の再検討である。『カラム』の誌面からは、西洋的な近代への対応が当時のムスリム知識人たちの課題であったことがうかがえる。彼らは国家機構のイスラム化において挫折を経験し、他方で西洋近代化による危機感を感じ、それに対抗す

るために宗教教育の強化とともに科学技術の取り込みによるムスリム社会の「近代化」をはかろうとした。近代社会におけるムスリムの道徳心のあり方や法制度のもとでの結婚などのように、ムスリム個人やそのイスラム実践を国家や社会といった公共空間においてどう位置付けるかが問われることになった。これは、近代主義を1970年代以降のイスラム思想や運動の展開、特にいわゆるイスラム復興運動と関連付ける視点を提起するものである。

政治、法や教育などの国家制度、そして社会における西洋的な近代性の枠組みとイスラムとのかかわりという『カラム』が提起する問題群は、1990年代末から今日に至るマレー・イスラム世界にも通じるものと思われる。くわえて、インドネシアとマレーシアそれぞれの国内で言論空間が重みをもつようになり、国境を挟む両国の間で越境し相互に参照しあう言論空間が生じつつある。その意味で、『カラム』の時代、すなわち国境を越えて言論が相互にやり取りされている時代と見る視角は、これまであまり積極的な意味づけをされてこなかった時代をとらえなおす必要性を示している。

各論考を当該時期の社会全体へと位置づけていくことは今後の検討課題となる。『カラム』を含めた当時マレー語刊行物の大きな特徴は、各誌が相互に参照しあい、論争を戦わせていたことである。『カラム』の議論をより広いマレー語ジャーナリズムの言論空間、さらには非マレー・ムスリムを含めた多民族社会全体へと位置づけていくことで、その思想の位置づけをより明確にすることが可能になるであろう。

## 〈参考文献〉

### 日本語

- 坪井祐司・山本博之編 (2011) 『『カラム』の時代 II—マレー・イスラム世界における公共領域の再編』 京都大学地域研究情報統合センター。
- 編 (2012) 『『カラム』の時代 III—マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』 京都大学地域研究情報統合センター。
- 編 (2013) 『『カラム』の時代 IV—マレー・ムスリムによる言論空間の形成』 京都大学地域研究情報統合センター。
- 山本博之 (2002) 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20: 259-343。
- (2003) 「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科) 7: 59-73。
- 編 (2010) 『カラムの時代—マレー・イスラム世界の「近代」』 京都大学地域研究情報統合センター。

### マレー語

Hamed Mohd Adnan (2013) *Majalah Melayu Selepas Perang: Editorial, Sirkulasi dan Iklan*, Penerbit Universiti Malaya.

Hashim Musa (1997) *Epigrafi Melayu: Sejarah Sistem Tulisan dalam Bahasa Melayu*, Dewan Bahasa dan Pustaka.

Talib Samat (2002) *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*, Dewan Bahasa dan Pustaka.

(つぼい・ゆうじ 東京外国語大学)